

## 功 勞 賞

山 田 等 氏 (大阪大学文部科学技官工学士)



山田 等氏は昭和 40 年度国家公務員採用初級資格を取得後、昭和 41 年 4 月 1 日より大阪大学に文部技官として奉職した。昭和 52 年 12 月 31 日までは工学部石油化学科有機イオン反応講座に在籍し、有機合成ならびに各種分析機器を用いた分析業務に携わった。昭和 53 年 1 月 1 日、大阪大学産業科学研究所附属材料解析センターに配置換えとなり、組成、分光分析関連業務の一端を担うこととなった。昭和 54 年大型質量分析装置の導入に伴い、質量分析装置による依頼分析、装置の運用・管理、技術指導などを主たる業務として現在に至っている。

質量分析に関しては、装置の維持管理は申すに及ばず、改良などに意欲的で、特に既設の装置での簡易インビーム EI 測定 (平成元年)、イオン源チャンバーの改造による TLC-FAB 測定 (平成 2 年)、FAB マス測定用ダブルターゲットの制作によるバックグラウンド補正測定 (平成 2 年)、GC-MS 用ガラスエンリッチャーの改造による洗浄の簡易化 (平成 4 年) を可能にしたことは特筆すべきである。また産業科学研究所内の学生、研究者らに対する定期的な技術講習会を開催し (昭和 59 年～現在)、研究の発展に寄与している。この間、昭和 63 年～平成 3 年にかけて集積した TASMACH 分光データベースの EI マススペクトルは「質量スペクトルデータ集」(平成 10 年日本質量分析学会発行) の一部に収められている。さらに、平成 7～9 年度にかけては、「FAB マススペクトルのデータ集積フォーマットの作成とデータベース構築の試み」と題した基盤研究に、専門的知識の提供者として参加した。さらに材料解析センターにおいて遂行されてきた、FAB マス法によるホスト-ゲストコンプレクセーション系のキラール認識能の評価に関する研究には研究スタート時 (昭和 63 年) から深くかかわり、新しい手法である「エナンチオマー同位体標識ゲスト法、同位体標識ホスト法」と名づけられた分析手法の開発に協力し、さらに現在もなお新たな展開に情熱をそそいでいる。

質量分析学会に関しては、関西地区で開催された、質量分析総合討論会、BMS カンファレンスには実行委員、あるいは協力者として積極的に関与した。特に、平成 11 年に開催された質量分析総合討論会 1999 (吹田) においては事務局担当幹事としてその成功に大きく貢献した。平成 8 年より、全国の大学、高専、共同利用機関において研究支援業務に携わっている技術系職員に働きかけ、「機器・分析技術研究会」を発足させ、その運営等の活動を行っている中で、質量分析にかかわっている技術者間のネットワーク作りに取り組み、技術、知識の交流に努めている。

以上のように、同氏の長きにわたるたゆまぬ努力は質量分析装置担当技術者として、質量分析分野、ひいては質量分析学会の発展に大きく貢献してきた。よって、日本質量分析学会功労賞にふさわしいものとしてここに認められた。